
世界が終わるその日に

一葉 綾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界が終わるその日に

【Nコード】

N3637P

【作者名】

一葉 綾

【あらすじ】

見つけた本には数行の文と破り捨てられたページ
この話の続きは僕らだけが知っている
世界が終わるまでの数分の
僕達の物語だ。

それは、とてもあっけなく。
終わりは唐突に訪れた。

「この本、読んだことがある？」

庵は隣で何冊かの本を吟味している栞に問いかけた。

「なにそれ？」

庵の手に握られているハードカバーの本は分厚いが表紙も背表紙にも何も書かれていなかった。

「世界が終わるその日に」

「え？」

「って名前の本なんだ」

ふうん、と興味なさそうに栞は目線を本棚に戻した。

それを見た庵はおもむろに表紙をめくり、目次に目を落とした。

【1 始まり】

真っ白な本のページにそうかかかれている。

捲ると文字が規則正しく並んでいた。

「もう、世界が終わるというのに、私にはとてもそんな感じがしないのは何故だろう」

静かに読み始めた庵の声に栞は手にしていた本をもう一度棚に直した。

「友達は、彼氏と過ごすといっていた。ならば私もそうするべきなのだろうか」

庵は栞のほうに視線をちらりと向けた。

「続き、聞く？」

栞は少し考えた後、首を縦に振った。

満足そうに庵が微笑むともう一度本に視線を落とした。

「もう一人の友達は、家族と過ごすといっていた。ならば私もそうするべきなのだろうか。

でも私にはとても信じられないのだ。

一週間の間に私が死ぬまでにしたいことなんて考えられない。

誰かと過ごすのか、思い切って今まで出来なかったことをしてみようか。

それとも遠い彼に会いに行ってみようか」

庵はそこで言葉を止めた。

栞がとても悲しそうな顔をしていたからだ。

「栞？」

「大丈夫だよ。ちょっと考え事してただけ」

栞はぎこちなく笑い続きを讀んで、と言った。

深く息を吸い込んで庵はページを捲った。

「私には大好きな人が居る。大好きといってもそんな安っぽい言葉じゃ表せない。

愛しい人だ。けれど彼の居る場所から私の居る場所は遠く離れている。

もう、携帯電話も繋がらないだろう。

電話は試してないけれど繋がるのだろうか？

水道はかろうじて通っているが、電気はその日によって使ったり使えなかったりする。

ガスは世界が終わる、その日が発表された日にすべて止められてしまった。

毎日、カウントダウンするように日にちは進んでいく。

毎朝、朝陽を見るたびに変な気持ちになる。

なぜこんなに穏やかな光が差し込んでいるのだろうか。

毎晩、星空を見るたびにおかしな気持ちになる。

世界は終わってしまうのに前より一層、星が輝いて見えるのは何故なんだろうと」

そこでもう一度、俺は言葉を止めた。
そして眉間に皺を寄せて本の言葉をまるで手で探るように文字を摩る。

「どうしたの？」

栞は本を覗き込んだ。

「なにこれ」

「続きが破れてる。きっと誰かが馬鹿馬鹿しくて破ったんだろうね」
俺は残念そうに言って本を閉じると小脇に抱えて
栞の手を引いて図書館の一番、陽のあたる場所に連れて行ってそこに座った。

「静かね」

栞は言葉を選ぶようにゆっくりと言った。

「僕達以外だれもないからね」

図書館の中に人の気配は無い。

きっとこんなときに図書館に来る人なんて居ないのだろう。

県の大きな図書館だ。普段のこの時間ならにぎわっていて読むスペースも無いはずなのに

休館日のようにただそこには今までの歴史を紡いできた書物だけが呼吸するようにたたずんでいた。

「ねえ、さっきの本の結末は？」

栞は俺の手を握ったまま顔を覗き込んだ。

「結末は……主人公の女の子が最後まで生きぬくんだ」

「でも世界は終わってしまっただけでしょ？」

「そう。けど彼女は自分で死を選んだりはしなかった。ただ今までと同じように日々をすごして、ただ当たり前のようにその死を迎え入れた。だから彼女は最後まで生き抜いたんだよ」

「そう。彼女は愛しい人に会いにいらなかったのね」

栞はそれが気になるらしく、残念そうに行った。

「会いに行ったよ。彼女はきっと彼に会うことができた」

「でも、最後まで一人で居たんでしょう？」

「彼は、もうこの世界には居なかったんだよ」

ゆっくりと言葉を紡いだら朶が息を呑む声が聞こえた。

「彼女は一人で生き抜いた。だから彼にちゃんと会うことが出来たんだよ」

たった一人でこの終わっていく世界を生き抜くのはどんなにつらいことだろう。

それでも終わっていく日々には彼女が絶望しなかったのは彼の存在があったからなのだろう。

「でも、私は違う」

朶は握る手に力をこめた。

「俺が最後まで居てくれる。終わった後も一緒に居てくれる。だから私は生きていくことが出来る」

「そうだね。僕らは二人だから、寂しくなんかないね」

きっと本が破られていたのは自分達の境遇と重なったからだろう。世界が終わるなんてただの幻想だと思っていたのだ。

「朶、僕は君が好きだよ」

「私は俺を愛してる」

ぎゅっとまた手に力をこめて時計を見た。

もうあと三十秒ほどでちょうど十二時になる。

「いままで、ありがとう」

「こちらこそ」

「終わった後もよろしくね」

朶はそう言って時計のほうを見た。
もうすぐ、終わる。

後、十秒……

「俺、大好き」

そういつて彼女は振り向いて庵に抱きついた。

三……二……一

一度だけ、さようなら。

（世界が終わるその日に）

（後書き）

世界が終わるとき感じるものは人それぞれでしょうが
きつと次の瞬間にすべてが消えてしまうなんて
考えることも出来ないんでしょうね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3637p/>

世界が終わるその日に

2010年12月7日23時07分発行